

Title	「やおい」からみる現代的親密性の現状と可能性
Author(s)	藤本, 純子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58546
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤本純子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24278号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	「やおい」からみる現代的親密性の現状と可能性
論文審査委員	(主査) 教授 川村 邦光 (副査) 教授 富山 一郎 准教授 北原 恵

論文内容の要旨

本論文は、序章で述べられているように、女性のサブカルチャーとして位置づけられる「少年愛マンガ」とボーイズラブの「やおい」作品を、先行研究を踏まえて、これまでの「やおい」研究の内閉する傾向を批判し、オタク文化というより包括的な視点から、広範な社会的コンテキストにおいて捉え直すとともに、「やおい」という文化現象が女性および社会にもたらしている意義を分析し考察する文化研究を目指している。

第1章では、「やおい」と呼ばれる男性同性愛をテーマとした「少年愛マンガ」作品が1970年代に登場し、性を結婚によってのみ許容する純潔規範つまり「性＝結婚」規範、愛と性と結婚の一致を説くロマンティック・ラブ・イデオロギーに対して、性に対する判断基準を愛に求める「性＝愛」規範が浸透し、男性同性愛性表現を受け入れることを可能にしたと指摘される。第2章では、「少年愛マンガ」とボーイズラブを比較し、前者は1960年代後半の大学闘争や反体制運動、またウーマン・リップでは女性という自己の性を問い返して主体的に向き合った反面、純潔規範やロマンティック・ラブ・イデオロギーがいまだに強く影響していたのに対して、後者では性を身体的快楽へと直接的に結びつける、快楽至上主義の表現が特徴であることが明らかにされている。

第3章では、「やおい」作品での男性表現の変化を分析し、フィクショナルな美しい異性の身体から、リアルな身体性をもった性的な他者として描かれるところに、性を介した親密な関係性を愛として重視する性意識・価値観へと変化し、男性身体が性的他者・客体的対象として欲望される段階に入りつつあると指摘される。第4章では、ボーイズラブに登場する男性の身分や地位などの関係性が分析される。第5章では、ボーイズラブに対する女性読者の欲望、つまり「やおい的欲望」が分析され、「本当の愛」という欲望の達成が困難な社会において、「空想的世界」の物語と男性同士の親密な関係性という二重の虚構を要請して「本当の愛」への欲望を充足させているのであり、それは現実からの逃避ではなく、現実への醒めた認識によると捉えられている。第6章では、ボーイズラブの男性同

士の性的表現におけるエロティシズムを問題視し、それは男性同士の性的関係の内に理想的な自己像を見出し、その閉じた二人の関係において自己イメージをさらに肥大させていくという、ナルシスティック（自己愛的）な内向性にあると指摘される。

終章では、これまで論じてきたことを踏まえて、「純粋化された親密性」の志向性として、特別な人ではなく、特別な関係性を求める志向性、関係性における役割の明確化という方向性、同質性を重視する藕化＝自閉化の方向性をあげ、これが「やおい」文化の現在として提示される。そして、このような親密性の社会的背景として、ポストモダンにおける社会の複雑化・多元化での帰属集団の流動化・相対化があり、個人が行動を自ら選択し懐疑的に生きていく「孤人化」と自己内面化、また多元化が進み、同質性を重視し、既存の規範に依存する関係性が指摘され、こうした自己の多元化という状況において、自己を相対化し、自律する可能性が見出されている。

論文審査の結果の要旨

本論文では、「やおい」と称される男性同性愛マンガの約30年にわたる歴史的展開において、女性の性や恋愛に対する意識・価値観の変化を分析し、これまでの「やおい」文化内に留まった研究視点を広げて、現在のオタク文化として包括的に捉えて、「やおい」の現代文化に対してもつ意義を批判的に考察した意欲的な論文である。「やおい」作品を、現代社会の状況と関わらせながら、作者の表現と読者の受容を社会的コンテキストに基づいて考察しているところに大きな特徴があり、以下、本論文の評価されるべきところを3点にわたってあげてみよう。

まず第1に、これまでの「やおい」論には、男性優位社会での女性のセクシュアリティと「やおい」との関係の問題視する研究、また両者の社会的意味を分析して、現在のジェンダー秩序への対抗的表現として評価する研究などがあり、そこでは女性やセクシュアリティという点に特別な過剰な意味を見出そうとするあまりに、「やおい文化」に内閉してしまう傾向を問題視し、本論文ではつねに批判的な姿勢を貫いて、女性である作者や読者の意識を現代の社会的コンテキストに基づいて分析し、すぐれた文化研究となっている。

第2に、ボーイズラブの女性読者の欲望を「やおい的欲望」と名付け、「本当の愛」という欲望の対象が困難な現実の社会において、「空想的世界」の物語と男性同士の親密な関係性という二重の虚構を要請することによって、「本当の愛」という欲望を充足させているのが、ボーイズラブでの「やおい的欲望」であり、それは現実から逃避ではなく、現実への醒めた認識を基盤にしていると分析されているように、作品を作者と読者の視点から分析している点に、本論文の評価すべきすぐれたところがある。

第3に、「少年愛マンガ」からボーイズラブへと展開する「やおい」作品を、各章で設定したテーマに基づいて分析し、「やおい」作品の女性の作者と読者の性愛をめぐる意識を浮き彫りにして、東浩紀が男性文化として論じたオタク文化論を補完するものとして、女性文化としての側面から「やおい文化」を考察し、オタク文化論を提示しているところが、本論文のオリジナルな点であると考えられる。

本論文では、「やおい」作品を女性オタク文化として分析し、社会的背景のもとで女性の恋愛・性愛やセクシュアリティに関する意識を考察しているが、「やおい」作品の作者

や読者を現代の女性として一般化して論じている傾向があったと考えられる。また、「やおい」作品の性的表現に関しては、他のジャンルのマンガのみならず、現代の芸術作品や性科学の言説などの近代思想と関連させて論ずることによって、さらに考察を深めることができたと思われる。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。